

『今月の天候と農作業』

通巻第5568号
6月号
平成26年 5月 29日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	30	40
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	30	40

【概要】

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 5月31日(土)～6月6日(金)

期間のはじめは高気圧に覆われて概ね晴れますが、その後は気圧の谷や湿った気流の影響で曇りや雨となるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 6月7日(土)～6月13日(金)

前線の影響が弱く、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。

<3週目から4週目の予報> 6月14日(土)～6月27日(金)

前線や湿った気流の影響で、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

1 追肥と水管理

コシヒカリは倒伏しやすいので幼穂が1割頃に、葉色により加減し行います。なお、田植え時に一発肥料を施用している場合は必要はありません。水管理は間断かん水により根の健全化を図ります。

2 病虫害対策

穂いもち対策で、穂ばらみ末期と穂ぞろい期に防除を行います。早期水稲ではカメムシによる等級格落ちが多く発生しています。薬剤防除は穂揃期と、その7～10日後の2回は行います。普段よりカメムシの繁殖場所である畦畔や周辺の除草を地域ぐるみで行うのも有効です。水田内のヒエやホタルイ等も早めに処分しましょう。

◆ 普通期水稲

1 代掻きと田植え

代掻き時の浮遊ゴミには紋枯病等の菌核もあり感染源となるので、かき出して処分しましょう。田面に高低があると、低い所はタニシの食害を受けやすくなり、高い所は田面が露出し除草剤の効果が低下しますので、できるだけ均平にします。

ヒノヒカリは白未熟粒が発生しやすいので早植えは避けます。田植えの際はいもち病やウンカ類の予防のために箱施薬を行います。田植え後の余り苗は補植が終わったら直ちに処分します。

2 除草

除草剤はラベルの記載内容をよく確認して正しく使用しましょう。ノビエの葉期は水田内の最も早い葉齢で判断します。投げ込み型のジャンボ剤やフロアブル剤は、水深が浅いと拡散が不十分となるので注意します。散布後は7日間は掛け流しせず止水します。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 収穫終了後の管理

今月でほとんどの施設野菜は栽培が終了します。次の栽培に向けて、ハウス内の害虫を死滅させてから宮崎型太陽熱消毒を行いましょう。

本県のきゅうり栽培において、スリップスが媒介するウイルスによる被害及びトマト栽培においてコナジラミが媒介するウイルスによる被害が依然として見受けられます。

これらのウイルス病に一旦感染すると、回復は難しく草勢の低下等により収量は大幅に低下します。ウイルスの媒介は昆虫であり、ハウス内に生息するウイルス保毒昆虫をハウス外に飛散させると、近隣の雑草に寄生し繁殖するため、次作への感染が懸念されます。ハウス内の作物残渣を持ちだす前に、ハウス内の蒸し込みを10日間程度行い、ハウス外への飛散を防ぎましょう。

◆ 夏秋果菜類の栽培管理

梅雨に入り曇雨天日が多くなるため、雨よけハウス栽培のきゅうり、ピーマン、にがうり等では、日照不足による草勢の低下や病害虫の発生が予想されますので、次の点に留意した栽培管理を行いましょう

①通路や畦間に滞水しないように、かん水は少量多回数で行う。また、ポリマルチ上に滞水した場合は速やかに除水する。

②着果負担を軽減するため、不良果を中心に摘果をおこなう。

③追肥は1回当たりの窒素分量を少なくし、窒素過多にならないように注意する。また、草勢が弱い場合には葉面散布等により草勢の回復を図る。

④摘葉や整枝・誘引を適切に行い過繁茂を防ぎ、通風採光を良くする。

⑤換気を良好にし、葉の濡れ時間を短くする。

⑥集中豪雨等に備えてほ場の周りに排水溝を掘るなど、排水対策を十分に行う。

(黒木正晶)

葉茎根菜類・いも類

◆ 食用かんしょ

トンネル栽培は収穫時期となります。収穫は、植え付け後100日目から可能となりますが、試し掘りを行い芋の肥大を確認してから収穫を始めます。植え付け後130日以上になると、皮色や形状が悪化しやすくなるので適期収穫に心掛けましょう。

◆ おくら

収穫期です。草勢が低下すると葉の切れ込みが深くなりますので、追肥や

摘葉については草勢を見つつ行いましょう。

◆ らっきょう

土壌水分の多いときに収穫すると球の光沢が劣り、腐敗の原因になりますので、晴天の続くときに収穫しましょう。自家採種をする場合は、生育不良株を抜き取り、ネダニの防除を徹底し球が完全に肥大充実してから堀上げ、陰干し後、ネットに入れて涼しい場所で保管します。

◆ さといも

トンネル栽培は収穫期となります。数株試し堀りを行って重量を計り、10^{kg}の換算収量が1トに達したら収穫を始めましょう。

◆ ほうれんそう

高冷地栽培では、順次、収穫、播種となり、4月に播種したものは、上旬より収穫期を迎えますが、収穫時に緑が濃くて葉肉の厚い状態にするため、収穫予定の7～10日前からかん水を控えます。収穫後は直ちに次作の準備に取りかかり中旬には播種しますが、降雨も多くなり、べと病の発生しやすい環境となりますので、抵抗性品種を利用しハウス内の通風を良くしましょう。

(河野健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

今年の着花量は、樹や地域によりばらつきが見られ、全体としては少ない傾向が見られますが、開花期以降の低温傾向を受けて、生理落果が少ない樹が多く見られます。結果数の多い樹では、6月中旬から、小玉果や内成り果を中心に荒摘果を始め、中玉以上の果実生産を目指しましょう。

◆ かんきつ全般

雨が多くなり、黒点病の防除が特に重要になってきます。1回目の薬剤散布から300^{mm}の降雨があると薬剤の効果がなくなります。250^{mm}程度の降雨があったら次の薬剤散布を行いましょう。

6月はカイガラムシの発生が始まる時期です。上～中旬に薬剤散布を行い、密度を減らすようにしましょう。

◆ 完熟きんかん

1 番花の安定した結果は大玉生産と早期出荷を同時に実現できます。出蕾期から開花期の加温や満開期のビニール被覆を実施し、1 番花の結果を促進しましょう。

◆ マンゴー

日焼けや高温防止のための過度の遮光は、着色不良や糖度の低下を招きます。遮光ネット等のこまめな開閉により、十分な日照を確保しましょう。収穫前から収穫期間中の過度の節水は、糖度低下や樹勢低下を招きます。定期的なかん水を実施しましょう。

収穫が終わった施設では、剪定等の作業に入りましょう。樹冠の縮小を目的とした強度の剪定は翌年の花芽の着生を悪くするので、決して行わないようにしましょう。樹齢の進行と共に、着花が不安定になったり、果実品質が低下している園では、改植を行いましょう。

2 落葉果樹

◆ くり

夏肥の施用を必ず行いましょう。特に、樹勢が落ちたり果実が小さい園での施肥は効果的です。また、翌年の結果母枝充実にも有効です。年間施肥量の2割程度を施用しましょう。

(山口 和典)

花き

◆ 夏秋キク

曇雨天が続いた後の晴天日には「葉焼け」の発生が多くなりますので、気温の低下を凶るとともに、循環扇によるハウス内の送風やカルシウム資材の散布、葉水をうつ等の対策を実施して下さい。「フローラル優香」の8月出荷作型については正常な開花を促進するため、消灯後からシェード（12時間日長）を2週間程度実施して下さい。また、貫生花の発生を軽減するために、過剰な施肥は控え、適切な栄養生長期間を遵守しましょう。

「精の一世」は6月10日前後が8月盆出荷の消灯日になります。消灯後に高温に遭遇すると開花が遅れますので、夜間はシェードを開放し、昼温も換気を十分に行いましょう。

◆ 秋ギク

秋ギク電照の親株床の施肥量は、窒素過多による穂の発根不良や冷蔵中の腐敗を避けるために、窒素成分で1000㎡あたり10㌔程度に留めて下さい。また、親株ほ場での病害発生は、本ぼへの病気の持ち込みにつながりますので、定期的な予防散布を必ず行って下さい。

◆ デルフィニウム

夜冷育苗は早期抽だいを防止するため、鉢上げ後から16時間、10℃の夜冷を行ってください。セル用土及び鉢土の乾燥や過湿は生育不良や徒長の原因になりますので、生育に合わせた細やかなかん水管理を実施して下さい。高温、多湿の育苗期間中は、特にチビクロバネキノコバエによる被害が懸念されますので、定期防除に努めて下さい。

◆ ホオズキ

7月盆出荷作型での着色のためのホルモン処理の時期です。ホルモン剤散布はできるだけ涼しい早朝に実施し、散布前後数日は寒冷紗により遮光して下さい。

ホルモン剤散布と他の農薬の近接散布によって色ムラや葉害が発生しやすくなりますので、高温時には換気を徹底して、高品質ホオズキの生産に努めましょう。

◆ シキミ

梅雨時期は黒シミ斑点病の感染の恐れが最も多い時期です。病害虫による被害は商品価値を低下させますので、適期防除に努めましょう。

また、シキミは特に湿害を受けやすい作物ですので、梅雨時期の排水対策を徹底して下さい。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜

梅雨に入り、気温・湿度とも上がり、子牛の下痢などの疾病が多くみられる時期になります。畜舎への風の通りを良くし、雨が牛舎内へ降り込まないよう畜舎カーテンの上げ下げを行いましょう。子牛の下痢対策では、石灰による牛舎消毒と敷料のこまめな交換が効果的です。下痢が発生している子牛に接触した場合は、他の子牛へ下痢が蔓延しないよう隔離するとともに、人を介して移らないよう、長靴や衣服、手指の消毒を心がけましょう。

乳牛に関しては、本格的な暑熱ストレスの時期になります。ヒートストレスメーターの温湿度指数（T H I）を毎日チェックしましょう。T H I 値が67以上の場合、牛舎ファンを常に回し、牛体に風が当たるよう暑熱対策をしっかりと行います。夜間に牛体を冷やすと乳量が増加しますので夜間のT H I 値のチェックも行いましょう。乳牛は大量の水を飲みます。牛がいつでも新鮮な水を飲めるようにして下さい。

豚・鶏では、梅雨の晴れ間の急激な気温上昇で熱射病の多発が懸念されます。寒冷紗の設置で直接日光を遮り、換気扇やダクト、あるいはミスト機による散水で畜舎内の温度が上昇しないようこまめにチェックが必要です。

◆ 飼料作物

サイレージも腐敗しやすい時期になります。サイレージの色が黒っぽかったり、手で触って熱く感じる場合、いつもと匂いが違う場合は要注意ですので給与しないで下さい。

長雨による排水不良は、湿害などにより飼料トウモロコシなど作物の生育を阻害します。ほ場周辺に排水溝を設置し、ほ場内に水が貯まりにくいようにします。

◆ 家畜防疫対策

豚流行性下痢（P E D）が続発しています。引き続き家畜防疫の徹底をお願いします。

（須崎 哲也）

特用作物

◆ 茶

1 二番茶の摘採

二番茶の摘採時期は降雨が多く摘採が集中しやすいことから、降雨の影響も考慮しながら摘み遅れのないように摘採計画を立ててください。

樹勢の強い茶園では、摘採前に5～7日間程度、黒寒冷紗等で被覆し品質向上を図りますが、被覆に伴う黒葉腐れ病や、葉擦れ、葉焼け等の発生は、逆に品質低下を招くため注意が必要です。

2 摘採後の管理

二番茶摘採後の整枝は、摘採の5～7日後に遅れ芽を除く程度で摘採面を整えます。

深刈り更新は、二番茶後できるだけ早く、古葉が残らない高さで実施します。また、一番茶後に中切りを行った園では、中切りの55～60日後に中切り面より3センチ程度高い位置で1回目の整枝を実施します。

施肥は、二番茶摘採前後に地区の施肥基準に準じて速効性肥料を施用します。

3 チャトゲコナジラミの発生に注意

以下の項目に注意して茶園を観察し、チャトゲコナジラミが発生していないかどうかを確認して下さい。なお、本虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の茶関係機関へ連絡して下さい。

- ①成虫は新芽に群がるので、茶園では新芽を観察する。
- ②茶園のうね間にあるクモの巣などを観察する。
- ③摘採袋や製茶工場の生葉コンテナの周囲を観察する。

(佐藤邦彦)

◆ しいたけ

1 伏込み地の管理

しいたけ菌は、30℃を上回ると菌糸生長が急激に減退し、35℃以上では死滅する恐れもあります。直射日光によるほだ木の温度上昇を防ぐため、庇陰が十分でない箇所には笠木等を補充しましょう。

2 ほだ場の管理

害菌の侵入を予防するため、梅雨に入る前に防風ネット等の撤去や周囲の雑草木の刈払い、除伐等を行い、風通しを良くしましょう。

また、倒れたほだ木や廃ほだを整理し、害菌・害虫の発生源にならないようにしましょう。さらに、しいたけ採取後のほだ木は、今後均一にしいたけを発生させるためにも、ほだ回しや天地返しを行いましょう。

(小田 三保)

◆ たばこ

今月は、中葉系の収穫・乾燥が主な作業となります。適熟葉収穫に努め、取り遅れや収穫ロスをなくし、完全収穫で収量確保に努めましょう。

1 収穫は、各ほ地のたばこの熟度を見極めて行いましょう。特に3回期以降の横搔ぎは、じっくり待ち、葉先が枯れ中骨の白化を確認して収穫しましょう。

また、立枯病などの病害葉はぐじり取りを行い区分収穫に努めましょう。

2 梅雨入り前には、ほ地の排水対策や環境整備に心懸け、耕種的病害防除を徹底しましょう。

農薬を使用する際には、使用基準を守りましょう。

3 乾葉の取ろし時は、吸湿・過乾に注意して荷造りを行いましょう。乾葉水分は、支骨が折れる程度が目安です。

4 収穫葉にマルチ片や土砂が付着している場合には除去しましょう。また、取ろし時にも異物が混入しないよう心懸けて作業しましょう。

5 包を貯蔵する際には、農薬・肥料・燃料など、たばこ以外の臭いを有する物を避けて貯蔵しましょう。

また、虫害の被害を受けない為に、全包ビニール梱包を行いましょう。梱包の際は水分に気をつけて口を養生テープ等で閉じましょう。

(松元 貴光)

内容の詳細について

6月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	葉いもち 穂いもち	並 —	5月中旬時点では、県内で葉いもちの発生は確認していません。早期発見に努め、病斑が認められたら速やかに液剤等で防除します。常発地や迫田等の風通しの悪いほ場では、特に注意が必要です。
	斑点米カメムシ類	—	斑点米の混入が極少量でも米の等級に影響するため、例年被害の発生する地域では必ず防除を行います。防除適期は穂揃い期とその7～10日後で、2回防除を行うと効果が高くなります。
普通期水稲	葉いもち	—	補植用の置き苗は、いもち病が発生しやすく、また、伝染源となるので早めに処分します。
	スクミリンゴガイ	—	早期水稲の一部で発生の多いほ場が確認されているので、水田の水口に金網を張り、貝の侵入を防止するとともに、生息数が多い場合は捕殺するか粒剤による防除を行います。
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並 やや多	アブラムシ類は、キュウリモザイク病やタバコ黄斑えそ病などのウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め防除します。
施設野菜 ※	土壌病害虫 コナジラミ類 アザミウマ類 アブラムシ類	—	近年、微小害虫によって媒介されるウイルス病（黄化えそ病、黄化葉巻病、モザイク病など）が問題となる事例が発生しています。次期作の発生源になりますので、栽培終了後は株を抜き取り、少なくとも10日間は施設を密閉し、媒介虫を死滅させてから残さを処分します。また、ほ場周辺の除草も徹底します。防除情報を発表していますので防除の参考にして下さい。
果樹全般	果樹カメムシ類	並	県内3か所に設置しているフェロモントラップでは、平年並の誘殺状況ですが、多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めます。特に、ウメやナシなどの結実中の果樹類では注意が必要です。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 黒点病	やや少 並 並	黒点病は、その感染源である枯れ枝の除去に努めます。また、剪定枝をほ場周辺に放置していると、激発するおそれがありますので適切に処理します。
	ミカンハダニ ミカンハモグリガ アブラムシ類	やや少 — やや多	ミカンハダニは生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5～1頭を目安に防除を行います。
茶	炭疽病 カンザリハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノボガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシカイヤラムシ	並 並 並 並 並 並 やや少 やや少	新芽生育期にチャノミドリヒメヨコバイに被害されると減収、品質低下が著しいため、萌芽期から開葉初期に薬剤散布を行います。チャノコカクモンハマキの防除適期は、発蛾最盛期の7～10日後で、チャノコカクモンハマキとチャハマキの発蛾最盛期の差が10日以内であれば同時防除が可能です。チャノキイロアザミウマの発生は、例年二番茶期から多くなります。多発生してからでは防除が困難になるので、早期発見、早期防除に努めます。

- 1) ※は防除情報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnn.ne.jp/miyazaki> です。